
僕の平穀なる日常はやがて歴史を大きく変えるような世界の危機に変化することになる、

響 航流

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の平穏なる日常はやがて歴史を大きく変えるような世界の危機に変化することになる、

【Zコード】

Z2758Z

【作者名】

響 航流

【あらすじ】

俺、水城御鷹の平穏な日常はある日突然の学校爆破によってすべて霧散した。

その後も妙な超能力を見せられたり、全てを知っている最強の少女に出会つたり、主人公が交代したりと、大忙し！？ ちょっと待つて！主人公交代ってどういう事！？

狂ひ前の物語（前書き）

稚拙な文章ですががんばります！

狂「づ」前の物語

。。。。。。

朝。

目覚まし時計の不快な音に目が覚めた。

カーテンの隙間から朝特有の眩しい太陽光が注がれる。
(眩しい・・・・・)

そんな当たり前の事を思いつつ、ベッドからはい出る。

学生にとつて学校の平常授業なんて苦痛でしかない。もちろん俺の学校も今日は普通の授業だ。

立ち込める憂鬱感をなげ払い、適当に着替えを済ますと、1階に降りる。

リビングの椅子に座ると、朝食を作る母親の背中が「おはよー」と使い古された挨拶。

その言葉を聞くと、『ああ、今日も昨日と同じ日常なんだな・・・

』と、そう思つ。

朝食をモムモムとほおばる間に自己紹介でもしようつ。

俺の名前は水城 みずしろ 御鷹 みたか。

高校3年生。

趣味は特にナシ。

特技も特にナシ。

さつきまでの光景を見てわかるとは思つが、ただの一般人である。

今までも変わった経歴はナシ。

強いて言うなら、俺には父親がいない。

そして不登校の弟がいる。

ただそれだけ。

十分変わっている氣もするが、それらが俺自身に何か影響を及ぼすことはない。

ああ。

あと、隣の家に幼馴染の女がいる。
お互い部屋がすぐ真ん前にあるため、時々ソイツが俺の部屋にや
つてくる（窓から）。

『それだけで十分お前は特別なやつだ。フラグ立てまくりじゃね
えか』と友人Aに言われたこともあるが、それに慣れている俺自身
にはその特別さは理解できない。

すでに俺に『イラツ』とか思つた人もいるかもしねりが。
我慢してください。

朝食を済ませ家を出る。

普通だ。ここまで。

家から学校までは、徒歩3時間

殺す気か。

もちろんバス通学だ。

バス停までは徒歩5分程度なのでわざわざ自転車は使わない。

俺は、『普通』という言葉が嫌いだ。

高校生にもなつてまだ非現実に巻き込まれるといつ夢を見ている、
といつわけじやない。

とにかく、新しい環境が欲しい。

自分の退屈な人生を変えてくれる 、環境が。

要するに退屈が嫌いなわけだ。

どんな人間だつてそう思つはずだ。きっと。

一般的の人間の俺が言つてゐるんだからそうに違ひない。

徒歩5分。駅に到着した。

そこにはうちの学校の制服を着た奴がいた。

それこそが先ほど話した、『幼馴染』といつやつなのだ。

彼女の名前は榎 さかき 雛姫 ひなき

「おつ、みーくん！元気してたかな？ちなみに私は元気してなか

つたよ 」

嘘つけ！バリバリ元気だろ！

「元気してたかつて・・・、昨日会つただろ。みーくんはやめろ」

「そーだつたそーだつた！えへへ」

このテンションに毎朝付き合わされてるわけだ。

これから始まる“普通”的学園生活に対する憂鬱感もすこしは晴れる。

「もーー遅いよー。バスにこいつ行つちやつたじやん！」

俺はこの言葉に、

「先に行けばよかつたのに・・・」

なんてイジワルを投げかける。

この言葉を今まで何度コイツに言つてきただとか。

こいつとき、こいつは決まってこいつ言つんだ。

「だつて、つまんないじやん

と。

多分バスの中で話し相手がいなくなる、と言いたいのだろう。その気持ちはわかる。

それこそ、”退屈”だ。

「・・・あ。ホラ。バス來たぜ。行こいつ

「うん・・・」

そうして俺たちはバスへ乗り込む。

バスは“変わらない日常”へ向けて、走り出した。

到着。

ちなみにバスの中はほとんど無言だった。

離姫^{ひなき}も弟が不登校であることは知っているが、深くは聞こえないとしない。

気を使っているのだろう。

今のアーツはそもそも部屋から出でていらない。

ここ数ヶ月顔も見てない気がする。

「学校ってどう思う?」

唐突にそんな事を聞かれる。

「どうして……どうだよ……」

「いや、楽しいーとかめんどくさいーとかさー」

漠然としてるなあ……

「んー……。楽しい。……楽しい、し、めんどくさい。かな

？」

「それさつき私が言つたやつじやん……」

「いやそうだけじや、それ以外になんかあるか？」

「『愉快だ』！」

「『楽しい』の言い方変えただけだろ」

いつも通りの適当な会話。深そうで深くない、普通の会話だ。時間にはまだ余裕がある。

校舎に入り、としたそのとき。

何か、とてつもない違和感を感じ、立ち止まる。

そこには一人の女の子がいた。

制服のデザインが少し違うので、おやじりく中等部の子だ。髪型は・・・ツインテール？・・・・・ちょっと違うな。

どちらかと言つとおさげに近い気がする。

今の時代にしては珍しいとは思うが、それ自体は大して気に留めない。

しかし、

その子は、髪の毛が金色だったのだ。

（金髪つて本当にいたんだな……）

なんて率直な感想しか思い浮かばなかつたが。

「どうしたの、みーくん？」

「……いや。なんでもない。みーくんはやめや

そして俺たちは教室へと向かつた。

教室ではすでに来ていた早寝早起きの生徒たちがざわざわと話していた。

いつもこんな感じだが、今日はいつもに増して騒然としている。

「おい水城ー！昨日のアレ、一体なんだつたんだろうなー？」

俺が自分の机にバッグをかけた瞬間に、友人が話しかけてきた。

こいつは秋瀬燐汰。

12月後半に大活躍してそなたがクリスマスの予定はナシ、とのことだ。

「アレ・・・・・・？・・・『ごめん、思い当たる節がない』

「ハア？ 昨日の“音”だよ！ ホラ！ 夜中にすづーー爆音みたいなのしたじやん！！」

「・・・・・？」

首をかしげる。一切思い当たらない。

「まさかお前・・・、あの音で目が覚めなかつたのか・・・・・？」

「まあ、多分そだうだうな」

秋瀬は2秒ほど口をあんぐりと開けていた。

「どんだけ深い眠りについてたんだよ・・・・・・」

「ああな。・・・で、その爆音ってのは？ なにがあつたんだ？」

「そう投げかけると、自信満々の笑みでこっちを睨んだ。

「ほんとはまあ、警察くらいしか知らないんだけどよ・・・なんと！ 新聞部部長であるこの俺が情報を入手してしまいました！！！」

「お前新聞部だったんだ・・・・」

「今更つー？」

「まあいいけど。で、その情報ってのは？」

秋瀬はその後も『僕らの友情を切り裂く一言をサラッと流された。

・・『とかぼやいてたが、気にしない気にしない。

「いいか・・・？ 聞いて驚け！ なんと！ この続きはCMの後we bでー！」

「いらっしゃ。

「いいから話せよ友達やめるぞ」

「ゴメンナサイ」

すぐ折れたな・・・。

「なんと・・・爆発事件が起きたらしいんだ！！！」

「・・・。まあ、爆音だからな・・・。」

「まあ最後まで聞けって。それがまあ、同時に12ヶ所・・・うちの町だけでだぜ！？考えられるかよ！？」

「そりやあ・・・たしかにすごいな・・・。」

「で、犯人もまだ見つかってないってわ」

「おいおい大丈夫かこの町・・・。」

「さあな」

キーンコーンカーンコーン・・・。

チャイムが鳴る。

「おら～お前ら席に付けーホームルーム始めるぞーーー」

「・・・つと、じやな！」

慌てて席に帰る秋瀬。

俺も自分の席に座る。

「え～・・・、先生一同で話し合つた結果ー、事件のほとぼりが

冷めるまで、学校は休校になりましたー」

・・・・・・・・・・・・

すげえ・・・。

こんな風に長期休暇がもらえるなんて、小学校のとき以来初めてだ・・・。

小学校の時は一度インフルエンザで休校になつたが、俺自身がインフルエンザでちつとも休んだ気にならなかつたからな・・・。まあこれくらいの事件が起きたんだ。この対処が妥当だ。クラスのみんなも不謹慎に笑つたりしなかつた。

俺たちももう高校3年生だ。

それぐらいの落ち着きはある。

「で、え、・・・、犯人が捕まる、もしくは、事件がしばらく起
こらなかつたら、また学校再開だからなー。お前らももう受験生だ。
決して気は抜かないようになーー」

俺は窓の外を眺める。

・・・。

まあ、これくらいの刺激はあつてもいいよな・・・?
こんな事めつたに起こらないぜ。
なにせこの世界は平和すぎる。

たまにはこんなスリルがあつてもいいと思う。

ま、どちらにせよ俺たちの人生なんてずっと普通の

。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?

一瞬、本当になにが起こつたかわからなかつた。
人間の脳の処理能力はすごいものだ。
たかが0・5秒ほどで、理解できた。
窓の外、少し離れた中等部校舎で

大爆発が起きていた。

俺たちの日常も、この世界も。

きつとこの日から何もかもが狂つていったんだ。

少年はヒーローになる

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン・・・

なんかすげー爆発が起きた・

「・・・

教室内はざわつく。

教師含むクラスメイト全員が窓際から外を見た。
爆炎が空へ昇っていく。

中等部に弟や妹がいる生徒は特に心配そうな顔で見ていた。
「なんなんだよ・・・。これ・・・・・・・・

自然と口から零れる言葉。

俺自身も非現実に酔いしれる余裕がなかつた。
次はこっちが爆破される可能性だつてある。

「先生ッ！俺たちも避難したほうが

「

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン・・

また爆発が起きた。

まだだ。

また爆発が起きた。

今度はどこだ！？ 音はかなり近かつた。

窓から外を見る。

すると、4つ隣の教室、3-Aから火の手が上がつていた。
そして同様に1-A、2-Aも爆破されていた。

ということは・・・・・次は・・・・・・・・・・・・

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン・・・・・・・・・・・・・

分かる。

次に爆破されたのは1・B、2・B、3・Bだ。

「・・・っ！生徒全員外へ避難しろ！！」

教師が叫ぶ。

この状況で全員冷静に逃げられるわけがない。

生徒たちは我よ我よと廊下へ走る。

俺は他の生徒たちに押されてなかなか外にでられない。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオン！！！

やばいッ！次はC組だ！！

爆風に廊下に出ていた生徒たちは押し倒される。

このままじゃ全員逃げ切れない・・・！？

人の群れは立ち上がり、階段へと走る。

各クラスの爆破には3分近くの空きがあった。

クラスメイトたちは大体出ていき、ようやく俺も教室外へでられそうだ。

しかしこのまま逃げるとD組爆破の巻き添えになるので、ここは冷静にD組爆破を待つ。

クラスには数人しか残っていない。

この数人は賢いのか、むやみに室外へ出ようとすると者はいない。

その“数人”のなかには、幼馴染の雛姫もいた。

しかし雛姫だけは様子がおかしい。

地面にペターンと座り込んでいる。

「・・・どうした！？」

「う・・・うう・・・・・・足・・・・・くじいたかも・・・」

思考回路が一瞬吹っ飛ぶ。

じゃあどうやってここから逃げる。

置いていくか？

見捨てるか？

無視するか？

・・・どうしても、『おぶつて一緒に逃げる』といつ選択肢が出てこない。

人間つて・・・弱い生き物だな・・・・・。

「ヒナつ！大丈夫！？」

離姫の親友の月島夜見が離姫のもとへ駆け寄る。

「え・・・あはは・・・・・・、足くじいちゃつた・・・・・」

「あはは・・・・・つて・・・・・・・・」

月島も動搖していた。

多分、月島も見捨てる選択肢しかないだろ？・・・。

俺と同じ、ふつうの人間なんだから。

「・・・わかった！わたしの背中につかまって・・・・・」

・・・・・は？

何言つてんだよこいつ・・・・・。

「だめだよ・・・夜見ちゃん・・・・・が逃げ遅れちゃう・・・・・！」

！

「大丈夫だよ！なんとかなるつて・・・・！」

「ならないよ！」

そんな会話を聞いてたら。

なんか俺つてみつともないな・・・・。

と、そう思えてきた。

自分の事ばつか考えて、他人を引きずり下ろしても自分だけ助かるうなんて・・・・。

人間としてはそれで普通なんだろうけど。

俺も一度くらい、子供の頃憧れてた“ヒーロー”ってやつに、なつてみたかった。

「離姫・・・・・俺の背中に乗れ！・・！」

言つてやつた！

言つてやつたぞチクシヨーーーー

一
でも
・
・
・
」

卷之三

卷之二

井伊直弼

「・・・・うん」

-۱۱۷-

姉に俺の背中にしがにと捕ま
その瞬間、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオン！！！！！！

D組が爆破された。

タイムリミットはあと3分。

下手をすれば廊下にまで被害が及ぶだろう。

1階まで逃げ切れは窓から逃げられる
だから、3分以内に1階まで逃げ切れって話だ。

そう言つて俺達は教室から飛び出した。

少年時代の記念（後書き）

いまだに「F」っぽさが出てこませんが、じゅうへんと並べてみると
思こます。

踏み入れた少年

俺は雛姫を背に乗せ、廊下へ飛び出る。

案の定、3階は全体的に火の海だ。

クソッ！ 時代遅れの木造校舎め！！ なにが『おもしろき 趣ある校風』だ

よー、恨むぜ理事長！

転ばないように慎重かつスピーディーに階段をかけ降りる。途中で口ケそうになつたが、なんとか持ち直した。

「・・・・・・」

3階と2階の踊り場を曲がると、熱で顔が溶けそうになる。

「チイツ・・・・、ここも火の海かよ・・・・・」

2階には火の手が上がつっていた。

「みーくん・・・・・大丈夫・・・・？」

心配そうな目で見つめる雛姫。

「 Bieber すんだよ・・・コレ・・・・・・・・・。そしてみーくんはやめろ

・・・・！」

「下がつてて！・・・！」

俺が立ち止まつていると、後ろからの月島の声。思わず振り向く。月島はどこからか消火器を持ってきていた。

「ナイスだぜ月島！・・・」

「『』褒美は弾んでくれよつ！・・・」

そう言うと月島は炎の壁に突つ込み、一気に消火。

こういつときの手際はとてもいい。

「ほらつ、急げ！ 時間がない！」

「あ、ああ・・・・・」

一気に2階へ降りる。

階段のコーナーを曲がつたときに、違和感。

「月島・・・・これは、マズイかもしれない」

消火器を投げ捨てた月島は、なんで？、と問う。

「俺の気のせいじゃなければよ……階段まで燃えてるんだ……」

「え……？」

「残り時間は！？」

月島はポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認した。

「……つて、時刻確認しても意味ないし……！」

こんな時にボケられても困る。

「ん……あと2分くらいだと……」

「くつ……」

これは本当にまずい。

消火器ももうないだろう。

何か火を消せるもの。何か火を消せるもの……。

うん。

無いな。

諦めるのは嫌だが、もう打つ手がない。

階段へ逃げようにも、3階からも火で上にも下にも行けない。

このままだとE組爆破に巻き込まれるだけだ……。

どうするよ俺。

困った俺は月島の方を見る。

俺つて、本当に弱いんだな……。

月島は下唇を噛み締めてうつむいていた。

「夜見ちゃん……？」

月島は深く何かを考えるようにして、そして何かを決心したかのようになにか顔を上げる。

「二人とも……目……閉じて……」

「……？」

なにが起こるかはわからないが目を閉じる。

目を閉じると、温度だけが伝わってきてさらなる恐怖だ。

俺は恐怖心に耐え切れず、うつすらと目を開ける。

そこに信じられない物、触れてはいけない物があるとも知らず、
田を開けた。

月島の左の手のひらには、魔方陣に似た光が集まっていた。

薄く光る陣に、月島は右手を入れる。

入れた先には月島の手はない。あの陣はどこへ繋がってるんだ？

月島が右手を引き抜くと、そこには消火器が握られていた。

（なん・・・なんだよコレ・・・・・どうなつてんだ・・・？）

月島は同じ動作を何度も繰り返す。

そして消化器を5本ほど取り出すと、じゅうじゅうを向いた。

とつさに田を開じる俺。

「田・・・開けていいよ」

もう一度田を開く。

夢じゃない。

たしかにそこには消化器が5本、転がっていた。

「これ・・・どうやって・・・・・？」

「そんなことどうでもいいだろ？」

そう言いながら月島は淡々と消火作業をする。

どうでもいいって・・・、かなり良くない気がするが。

「まあとりあえず道は開けたから、はやく逃げよつ」

月島はそう言い、走り去つた。

「・・・・・・・俺も急ごつ・・・・」

無事校舎から出られた。

つた・・・！」せよ・・・はあ・・・じほ・・・けほ・・・！死ぬかと思

実際死にかけてたしな。

消防の人が話しかけてくる。

これが大丈夫に見えるのかよ・・・。

それでも正直には言えない俺だつた。

「それでもよ……E組は爆破されないな……」

「そーだね……」

もう脱出してから5分近く経っている。

なぜ、爆破されなかつたのだろう……？

しばらくすると、校長が自宅退避を言い渡した。
みんな複雑な表情で帰路につく。

中には避難しきれなかつたA組の全員とB組、C組の数名の名前を叫ぶ者もいた。

「……離姫。俺たちも帰るか……」

「……うん」

徒步で駅へ向かう。

歩く先には、なぜか月島がこつちを向いていた。

人ごみにまぎれていたせいが、離姫はその姿に気づかない。

歩を進めるうちに月島とすれ違う。

特に何も言わずにすれ違おうとした。
だが、月島はそうでもないらしい。

二人きりで話したい事がある。

そう、俺の耳元で囁いた。

咄嗟に振り向く。そこには歩き去つていく月島の姿が見えた。

「……つ！ すまん……先に一人で帰つてくれ……」

「！」

「うえ！ ？ ？ ？ ？ ？ ？」

「忘れ物をしたっぽい！ ！」

そんな適当な言い訳でごまかすと、俺は月島のあとを追つた。
少なくとも愛の告白でないことはたしかに分かっていた。
それがいい話じやないことだつて、きっとわかつたはずだ。
それでも俺は追いかけた。

きつとその先に俺の求めていた非日常が訪れるのではないかと、

期待してたから。

迂闊にも 、踏み入れてしまつたのだ。

踏み入れた少年（後書き）

やつと超能力っぽい場面を見せられました。
なんか楽しくなつてゐた・・・！

その少女、七瀬 愛理

「・・・・見たでしょ」

俺は月島について行き、小さい路地に着くなりそう聞かれた。

「見・・・た・・・・、つて?・・・何を?」

なんとなく予想はついたが、全力でシラを切れます。

ハイ。

なんか、本当に惨めだな俺・・・。

「水城だつて、大体予想はついてるんだろー? 私がなんのこと話してるか、さ」

「・・・いや、さつぱり」

意地でもシラを切る。切つて切つて切りとおしてやる。

「チツ・・・・話にならん・・・・・」

イジけた風に舌打ちすると、月島は後ろを向いた。

「・・・なあ、なんなんだよ一体。その“見た”つてのは・・・シラを切りながらあわよくば聞き出してやろう、という魂胆である。

しかしその質問をすると睨まれた。

月島は小さくため息。

そしてまた睨む。

ダンツ!!

「・・・・つ・・・・・」

月島は、俺のネクタイを驚掴みにして俺の背中を壁に押し当てるよびに顔を近づける。

「じやあ質問を変える。水城は私が“目を開けるな”と言つたとき、目を開けたか?」

「・・・・・・・・・」

その質問は卑怯だろ・・・。

離姫は呼ばれず、俺は呼ばれた。

つまりこいつには、バレてる。

さすがに逃げ切れんか・・・・・。

「・・・・・」じめん。開け

「

「それ以上の暴行はやめてください」

突然知らない女の子が割り込んできた。

しかしこの子、どこかで見たことが・・・・・。

いや、深く印象に残つてる。

「水城一、この子友達ー？」

「いや、知らない子だけビ・・・・・・」

「ふむ・・・・・・」

乱入したその子は、ネクタイをつかんだ月島の腕をしつかりと掴んでいる。

おまけに、金髪である。

今朝見た子だ。

「それ以上の一般人への暴力は、光星学園中等部風紀委員長であるこの私が許しません」

「中等部・・・ねえ。ビーリで身長が低いわけで・・・・」

「平和秩序を乱す者に年齢も身長も関係ないです。それにあなただつて、大して変わらないじゃないですか」

皮肉つた月島の言葉を軽くあしらひその子は、とでもかつこよかつた。

「まあそつだけビー・・・・・。悪いけど私はこのお兄さんにはりょくと用があるだけなんだよー」

「私にはただの尋問にしか見えませんが・・・・?」

「よかつたね。拷問じゃなくて」

「茶化さないでください」

ここまで来ると、さすがに月島も少し困った表情。

それでも俺のネクタイは離そうとはしないのな・・・・。

「とにかく、それ以上の暴力行為は許しませんからね・・・」
その子は一度まばたきをすると、月島をしっかりと見て、続ける。

「SHEET 1超能力者、月島 夜見さん」

その一言、月島の全身に悪感おがんが走る。

ネクタイをキツく締めていた腕が、するりと解け落ちる。

「ははは・・・、参ったな・・・。・・・君、何者?」

月島の手を離したその子は、指を口元に添え、考えるよつた仕草をし、答える。

「光星学園中等部風紀委員、七瀬 ななせ 愛理あいりと申します」

その子はやつやままでとまは裏腹に可愛らしく、やつぱつた。

その少女、七瀬 愛理（後書き）

とつとつパツキン発場です。
でも実際日本に金髪の中学生なんているんですかね?
そもそも中学に風紀委員なんてありましたっけ?

始まり

「 つ。超能力者つてのは正解。でもさ、SHIEST

「 つてなんのこと?」

「 それにはお答えしかねます

「 ・・・」

超能力者・・・。

まさかそんな・・・。

心の整理がうまくできな

そんなもの信じられるかよ。

でも俺は実際見ている。

でもあれは、どちらかと言ひ魔法に近かった氣もある。

にらみ合ひ月島と七瀬さん。

「 なあ、超能力つて一体なんなんだよ・・・・・・」

俺はその質問を月島にしたのか、それとも七瀬さんにしたのかは
わからない。

質問に答えたのは七瀬さんだった。

「 さつきの会話を聞く限り、あなたも当事者の一人でしょう。中途半端に知つて言つてふりられるのも面倒ですので、その質問にはお答えします」

前置きが長いな。

「 超能力とは 、そのままの意味です

・・・・・・・。

前置きの割に本文は短いのな。

「 そーじゃなくつて、もつと、いひ、なんというか・・・・

「 言いたいことは分かります。しかし私たちだってよくわからな
いんです」

と、七瀬さんが言つと。

「 その割にはなんか色々知つてそういう事言つてたけどなー

と、月島が皮肉たつぱりに返す。

「少なくともあなたよりは知っています。よく知りもせずこんな例^{レギュラー}外項目を扱うわけにもいきませんので」

なんだよこの皮肉合戦。

「まあ、こんなところであなたと言い争っている暇はありません」

「私たちが暇人だつて言いたいの一？」

「『私たちが』つて・・・、俺も入つてんのかよ・・・・・」

「いえ、私には今回の件についての調査がありますので」

今回の件・・・?

学校爆破の件か。

「この事件について、現在警察が調査を進めています。しかしどうもおかしな点があるんですよ」

「おかしな点・・・、とは？」

「爆発物が、見つかってないんですよ。どの教室でも。もちろん、爆破される予定だったE組でも」

・・・・・・・?

「つまり、それが超能力者の仕業つてわけ？」

「『明察です。あなた方にはそれに協力していただきたい。』

はあ・・・・・?

「『あなた方』つて・・・、俺も入つてんのかよ・・・・・」

「当然です。あなただつて、関係者でしきう？相手は超能力者ですでの、あまり無茶な協力はさせません」

「なあ、その、『あなた』つていう呼び方をやめてくれないか？」

七瀬さん

そう頼むと、七瀬さんは透き通つた瞳で俺の顔をじっとみつめる。

「それでは、水城御鷹さん。それと、年上に『さん』を付けられる

ると気持ち悪いので呼び捨てでいいです

フルネームかよ・・・・・。

てか、気持ち悪いって・・・。

気にはなつたがそれ以上はあえて何も言わなかつた。

「・・・で？協力って？俺は一体何すれば？」

「それは…………。まずいですね。今すぐここから離れまし

よ

「は・・・？なんで？」

「あと40秒です」

意味のわからない事を言うと、七瀬は俺の手を引き走り出す。

後ろから月島もついてきた。

そのまま走り続け、無事に路地を抜け出した。

すると

、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン！――！

また爆発。

目の前の町工場からだ。

先ほどいた路地は崩れさつた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんで七瀬は、こんなことが分かるんだ・・・？

そう訊きたかったが、怖くて訊けなかつた。

「分かりますよね？この町は危ない。これ以上被害を拡大しない
ためにも、一早い解決が必要なのです」

握っていた俺の手を話すと、七瀬は俺と月島に、もう一度言つた。

「この町の秩序のために、ご協力お願ひいただきたい」

俺も、月島も、黙つて首を縦に振つた。

今日の災難、明日の寝床

翌日。

「えー・・・。というわけで、ただいまより第一回犯人だーれだ
議論大会始めたいと思いまーす。はい拍手ー」

パチパチパチ。

七瀬は「丁寧に小さく拍手をした。月島は暫つまでもなくノーア
クション。

空氣は読まないタイプなんだろう。

「月島、拍手」

「しない！」

「ノリ悪いなー・・・」

キッと睨む月島。

これ以上言うと俺の顔を挟んで拍手されそつなので、よしとおこ
う。

「ああ、拍手なんて別にこくらやつてあげてもいいんだよ?でも
ね・・・」

「もつたいぶるなよ。言いたい」とは言つていいぞ

「じゃあ言わせてもらひや。なんでこの会議私ん家で始まつたの
!？」

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

七瀬と俺は沈黙し、月島の顔を眺める。

「俺だつて別にここでやりたかつた訳じやない」

「私がお願ひしたんですよ」

七瀬はそう切り出した。

「男性の家に上がるのはどうかと・・・。私も風紀委員ですので

一応

「ぬ・・・じゃあナナセさんのお宅でやればよかつたじゃないですかよー・・・」

なんか変な口調になつてゐる。

「あなた方を家に入れると危険な氣がしたので」

「あなた方つて・・・俺も入つてんのかよ」

「それはどうこいつ意味だよー。荒らしたりしないよ?」

そうですか。なら、今後は検討します。

七瀬はそう言つと、携帯電話を取り出してカチヤカチヤとつつく。会話の途中でも平氣で携帯、というのはやはり七瀬も現代人なんだな・・・と悟る。

携帯電話を持つてきたバッグにしまつと、急に立ち上がつた。そして拳動不審にあたりを見回す。

「どうしたの?」

月島が尋ねると。

「家宅搜索です」

七瀬がスパツと答えた。

「なんで!? されるのは嫌だつて言つたクセにするのはいいの!?

「まずは味方の潔白を証明しないと捜査は進みませんよ」

「そのセリフ、ワクワクしながら言つ葉だつけ!?」

七瀬はとても楽しそうな顔で部屋をキョロキョロと見た。

その後もどつたんばつたんと楽しそうにはしゃいでいたが、そろそろ止めないと危ない。

「お前ら落ち着けよ・・・家の方に迷惑かかるだろ・・・」

「・・・? そう言えば、この家には私たち以外の人の気配がしませんが」

「お前気配とか読めんの!? かづけー!」

「言葉の綾^{あや}ですよ」

俺たちは俺たちで騒いでいるが、月島一人ボーッと座つていた。

まるで別の考え方をしてるみたいに。

「・・・どうした円島？」

「うえ？ああ・・・いや、なんでも」

「・・・？」

そう言い、手を横に振る円島の顔は今にも泣きそつだつた。
その理由なんて俺には分からない。

しかしここで理由を訊くのは野暮つてもんだ。
さらつと流すのが粹つてもんだう。

「で、 そう言って手を横に振る円島先輩はなんでそんなに今にも泣きそうな顔をしているんですか？」

野暮な奴はここにいた。

「オイ・・・、七

」

七瀬の無礼を咎めようと発した言葉はすぐ遮られた。

「私、いないんだよ・・・、両親」

月島はうつむいて、 そう答えた。 切ない顔で。

俺は七瀬の方を、 半分睨むように、 見る。

その顔は『無』だつた。

特に何も思つてないような、 そんな顔。

「私には弟も居るんだけど・・・、 病氣で、 ずっと病院」

小さな声でそう言つた。

「そうか・・・・・・」

どうすんだよこの空氣・・・。

『犯人だーれだ』とか言つよつた空氣じゃない。
シリアルスなんだよ。

俺の家にも父親はいなければ、 母親と弟がいる。

死んでないどころか弟に至つてはすつと部屋の中にいる。
だから寂しくない。 きっと。

「・・・・・・・・・・・・」

• • • • • • • •

誰も喋らない。

本当にいいんだよ」の本腰・・・。

『元気に仕切り直そう!』とか言う奴がいたらそいつは

「そうですか。それは気の毒ですね。それでは、元気に仕切り直しましょう。」

空気が読めない奴は、ここにいた。

予想通りの七瀬愛理である。

「だから以上空氣が悪くなるのせ困るので便乗しておこへ
「そつぎよ。でも、犯人を見つかる手舞がつばれてあるのか？」

「ありません。あるんならとっくに私一人でやつてます」

「じゃあどうして探すんだよー」

「わかりません。なので今」お開きです

「なんで集まつたんだよ！？」

まあ、もう夕方なので仕方ない。

「それでは各自、犯人を探す方法を考えておいてください

お前結構無茶な性格だなー・・・

- はし -

というわけで。

といふか、どういふわけか本田はお開きとなつた。

「ねじゅまつめた

俺と、それから空気を読まない野暮な七瀬は丹島（の家）に挨拶をすると、玄関を出た。

特に交わす言葉もなく5歩ほど歩く。

「あ、水城御鷹先輩。ちょっとここで待っててください」

「フルネームはやめてくれ」

そんな俺の切実な願いも聞き入れず、七瀬は丹島の家に戻る。忘れ物か・・・?

しかし、七瀬は玄関に入ると、扉がゆっくりと閉まつた瞬間に出てきた。

「お待たせしました」

「忘れ物か？」

「いいえ、ちょっとしたイタズラを・・・」

意味ありげに微笑む。その“ちょっと”がどれくらいのもののか。

「む。こいつのやりたいことはそつぱり分からん。

「まあいいです。帰りましょう」「

そう言い七瀬は俺の腕を引っ張る。

「帰りましょうって、お前ん家こいつちなのか？」

七瀬は黙り込む。

急に俺の腕から手を離すと、俺の方を真正面から見て、言った。

「違いますよ。護衛です。こいつ爆破が起こるか分からないんです

よ？」

そして、くるっと方向転換。俺の家がある方に向き、勝手に歩き始める。

「まあ、もう手遅れかも知れませんがね・・・？」

「お前が言うと冗談に聞こえねー・・・」

本当に呆れたものだ。

俺は歩く七瀬の背中を追つた。

「冗談じゃない。

本当に、「冗談じゃない。

俺はもっと用心しておくべきだったんだろうか。

いや、用心してどうにかなる問題でもなかつた気がする。

俺は頭の中がぐちゃぐちゃに揉き回されるような感覚に陥る。

これを現実だと認識してしまうと何毛か毛が潰れてしまいそうで。

「あーあ。これは派手」「やつらが一撃したね」……

ああこれに済まにやうなにいまとかく
粋の七顛がまたも空氣を読まゞて譲りかかる。

說文正簡卷一

俺の家が、燃えていた。

窓といつ窓からは黒い煙が空へと放たれ、距離を置いても顔がとても熱い。

「なん
・
・
・
で
・
・
・
・
・
・
・
・
?

誰に投げかけたのかも分からぬ質問に、七瀬は答える。

爆破に巻き込まれたんでしね。お氣の毒は」

少々ガチンとくる言い方だ。だが俺はそれと「N」じゃなかつた

魔女がいた。魔女がいた。魔女がいた。魔女がいた。

うかできなかつた。

「ツーベッドだ、秋雨は！？」
ちやんと逃げたのかよー？」

六
一

「…………ハア？ お前、なんであいつのこと知つてんだ？」
七瀬はそれでも、冷静に燃え盛る俺の家を見つめる。

「一応、クラスメイトですか？」

七瀬は、単調に、淡々と、そう答えた。

今日の災難、明日の寝床（後書き）

今回は思いつきで主人公の家を燃やしました。

これが今後の展開に吉とするか蛇が出るか・・・。

まあ、何もわからないうちで意味です。

今更ですが、感想や誤字・脱字などあればよろしくお願いしますー！

そして俺は事実を知る

俺は寝床に困つたのでクラスで一番親しい友人、秋瀬燦汰の家で泊まらせもらうことになった。

「お前も大変だなー・・・1週間で2度もあんな目にあうなんて

三

リビングテーブルのソファーに座る俺に、真正面に座る秋瀬は言った。

「まるで何者かに狙われてるみたいですねー」

と、なぜか俺の横には秋瀬の姉、秋瀬 まどかさん

ふつうにいう時って俺の正面側に座らないか？

秋瀬のお姉さんは物腰の柔らかい人で、長い髪の毛を後ろで縛っているところに生活感を感じる。

は信じがたい。

対する秋瀬のぼうほ、騒ぐ怒られる喋り始める騒ぐ怒られる、をひたすら繰り返すような単細胞なのである。

「……………。やつですね……………」

無理せじ笑みを作れ
そへ答へ

いなくなつたんだろ?』

「ああ。事件の後にはもう居なくなつてた」

「ああ、うん。ありがとう・・・・・」

俺は、差し出されたオレンジジュース（らしきもの）をグイッと

飲む。しかしオレンジジュースにしては少しひとロツとした舌触りがある。

「これ、なんのジュースですか?」

「見てのとおりオレンジジュースだろ？」

「お前に訊いてねえよ……。お前に訊いたんだつたら敬語なん

か使わん」

俺はまどかさんに訊いたつもりだった。

まどかさんはおつとりとしている。

「あの、まどかさん……？」

まどかさんは、おつとりとしている。

「まどかさん……、聞いてますか？」

まどかさんは、おつとりと（以下略

「姉貴。聞いてるか？」

秋瀬はまどかさんの肩を軽く揺わる。

「ん？あら、『ごめんなさい。なんの話をしてたんだっけ？』

「いや、これ、何のジュースですかーって……」

「あら、美味しくなかつたですか？」

「いや、おいしかつたです。はい」

「そのオレンジジュースは隠し味にハチミツとハチノコとプロテインをいれたんですよ」

「なるほど、どうりでドロシとザリフとして……プロテイン

！？」

なんで客人に出すジュースにプロテインが！？

俺にどうなつて欲しいんだ！？

「あ……あの……なぜプロテインが……？」

「え？男の子ってみんなプロテイン好きじゃないの？」

「あつ、姉貴！俺と他の奴を一緒にしないでくれ！！」

「お前日常的にプロテインを摂取してたのー？」

「へへつ。昔の話だ……」

照れくさそうに言つた。てかお前そんなに筋肉ないだろ。

「お前、プロテイン飲んだからつて筋肉ムキムキになるわけじゃ

ないぞ」

「そ、そうなのー！？」

予想通り、案の定の反応だ。

にしても、変な家族だよ。コイツら。こんな綺麗な姉だけでも分けて欲しい。

「そういうや、まじかさんつてもう大学生ですよね？なんでこりこ？」

「俺たちが高校3年だから、その姉はもう大学生のはずだ。ひょっとすればもう社会人に出ているのかもしれないが、まじかさんはかなり若く見える。？」

むしろ高校生にすら見える。

「ちょっとこりちらに用事があつて……それで」

「そつすか……」

特に気になつたわけでもないが、なんとなく質問しただけだった。なんか気まずいな……。

こんな仲のいい姉弟の中に混じるなんて……。

誰かこの空気をかき乱してくれ――――！

ピーンポーン

チャイムの音がした。

音の近さからして、この家だ。

「誰でしょう……？」

まじかさんが部屋から出ていき、見事に募つていた緊張感から開放される。

た、助かった……。

「お前のねーちゃん、美人だな……」

「あー、昔からモテてたもんな……」

「まじかさんて、うちの高校だつたっけ？」

「そうだぜ」

秋瀬とは高3になつてから知り合つたので、姉のことは知らない。

秋瀬自身の口からも聞いたことはなかつた。

しばらくすると、玄関の方からバタバタとスリッパの音が近づく。リビングの扉が開くと、顔をだしたのはまどかさん。

当然か

—誰だつたのねーちゃん?—

女の方 水塙君に用事たつて上

お
備
て

方 用鹽が十湯ぬかりかと思ひが

的中。

ドアの前にいたのは、丹島だつた。

一 何の用だよ・・・・・・・・

月齋の顔はしゃわか不機嫌そにた

いや 昨日は 私の家から帰るとさうした

卷之三

家のブレーカーが……、全部落ちた……

「……………陰湿な嫌がらせだな……………」

吾屋に居てから電氣が出来てから、今が電氣便り

定ブレー カー だつたよ ・・・・・

「大変だな・・・・・」

で、水城の家に行つてみたら・・・、なんか焼け焦げてたしさ

だつたわけよ「

「なんつーか、災難だな・・・」

— てわけで七瀬に会つたら叱つておいてくれよ —

備はあいの保詰番

「さあ、出発だ！」

月島はおとなしく帰つた。

なんだつたんだよ 体

ドアがゆっくりと締まるのを見廻かぬと、俺はリビングに戻

ピーンポーン

れなかつた。

今度はなんだよ？

卷之三

そこに立っていたのは、七瀬だつた。

昨日 月島先輩の家のアレーカーを全壊落とした件にて謝

家知つてゐるだらうが――！」

「ワカリマセンター（棒読み）」

ケソツ
かこほらあみ』まで律儀に読みせかて
・・・
・・・
・・・

「…………なんだよ？」

「なんと、」

七瀬は無駄に余韻をあける。

「犯人を特定しました」

「ボケてる場合じやなかつたよね！？そつちが大本命だよ！！」

「で、誰なんだよ・・・・・その犯人ってのは・・・・！」

「先輩のよく知つてる人物ですよ・・・・・」

•
•
•
•
•
•
?

よく知つてゐる人物、と言われてもパツと浮かばない。

て！？誰なんだよ！！！？？？

二二二

焦らしやがつた！？

焦らしあがつたよコイツ！！

「超能力とかもうふつちやけどうでもいいよ！犯人教える！！」

で
し
ょ
?

名探偵氣取りだよコイツ！！

卷之三

1

L

「だから犯人は大きな施設を集中的に狙つた」

俺の率直な疑問を華麗にスルーしやがった七瀬は、名推理を披露し始めた。

「しかしその中には例外が一つありました。それがなんだか分からります？」

1
つ
け

「アーヴィング、用語の定義」

「正解です。そしてもう一つが、月島先輩の家なんですよ」

何言ってんだよエイツ……意味わからん

・・・ツ? はあ? 爆破されてないじやないか・・・」

「そうですよ。されませんでした。私がブレーカーを全部落としたことによつて、ね」

なるほど・・・。それならブレーカー事件と犯人の超能力にも辻棟があうな・・・。

「その“例外”的共通点。それは

「・・・俺がいた場所、つてわけか・・・」

「正解です」

七瀬はおどけたように、手を鉄砲の形にして俺を撃つジエスチャーをした。

「・・・？でもよ、それだとこの家も爆破されてておかしくないんじやないか？」

「ええ・・・。犯人も、自分のアジトは壊したくないでしょうね」

自分の・・・、アジト？

自分の家つてことか？

「え・・・。それつてつまり、犯人は・・・」

「その通りです。犯人は、先程からあなたの後ろにいる、秋瀬先生輩ですよ」

え・・・？

後ろ・・・？

後ろを振り返る。

全身にゾクツと悪寒が走る。

そこには、気持ち悪い笑みを浮かべた
汰がいた。

、秋瀬 燦

そして俺は事実を知る（後書き）

意外性を追求しました。
ただそれだけです！！

ジジ、ジ・・・・・・ジ・・・・・・・・・・
玄関の蛍光灯がパチパチと点滅する。
まずいッ！

逃げようと家の外に体を捻る。
しかし、段差のせいでバランスを崩した・・・！
ヤバッ・・・・死ッ
ぐいっ。

全身の重力が狂ったように、引っ張られた。
「ぐえつ・・・・・」

そんな間抜けな声を上げながら俺の全身は家の外へ放り出される。
その瞬間

ドオン！！！

玄関口が真っ赤に染まり、熱が露出した肌を覆う。季節のおかげ
もあつてか、肌の露出は少ない。

煙が晴れ、家の中が見渡せるようになると、秋瀬は軽い舌打ちを
かました。

まるで 、俺が死ねばよかつたと言わんばかりに

。

俺は秋瀬のその表情に、リアルな恐怖心と激昂感が込み上げる。
信じてたのに！！

友達だつて・・・、裏切らないつて・・・・信じてたのに！

「ダメだよなア・・・水城オ？人間てさ、妙な力を持つちまうと
妙にそれを使いたくなつちまう。まるでお年玉をもらつたガキみて
えによオ・・・」

秋瀬はフラフラとこっちに向かつて歩いてくる。

「それは制御しきれないあなたの責任です。あなたはその超能力ちから
に溺れ、無闇に足搔いているだけです」

凛々しく説教した七瀬は、向かってくる秋瀬に動じず、ただ見据える。

「七瀬、ここは逃げたほうが・・・」

「彼の能力は室外ではただの飾りです」

それもそうだった。

えと・・・、『人工的な明かりを爆破させる能力』だけか？
人工的な明かりは昼間の室外にはほとんどない。あいつの能力は
室外では無意味なのだ。

「ハハツ・・・じゃあ余裕だなツ」

「いや、案外そうでもないんですよ・・・」

「！？」

よく見ると、秋瀬の手には包丁たるもののがしっかりと握られていた。

「なアにコソコソしてんだよオ・・・。逃げなくていいのかア・・・？」

「SHIFT-1如きに遅れをとる私ではありますんで」

キッパリと。キッパリと宣言した。

自信満々だなー・・・・・。

「先輩は逃げてください。邪魔になるので」

自力で立ち上がる俺に対して、七瀬は辛辣な言葉を浴びせる。

「邪魔つて・・・、そんな言い方ツ

ヒュン

秋瀬は包丁を横に難いだ。
標的は七瀬だ。

驚いたことに七瀬は、不意打ちにも近い一撃をあつさりとかわしてしまったのだ。

あつさりと。眉一つ動かさず。

「チツ・・・・・！」

秋瀬はその七瀬の行動を偶然であると断定し、包丁を手前に引き、
次は突く。

俺の脳内では、七瀬が避ける、という考えしかなかつた。
七瀬にはそれをするだけのスキルがある。

どういう原理かは知らないが、七瀬にはその速度の世界が許されている。

俺の予想は、完全に外された。

チチ

何かが切た。

それが、秋瀬の腕である事は誰がどう見ても一目瞭然。

「…………ツ? ! ぐツツ…………、 ンだよこれH—! ? ?」

秋瀬は今までに見たことがない、“自分の腕が無い”状況に戸惑うばかりで、反撃の手を打とうとはしなかった。

「これで力の差がお分かりですか？」

凶器を持った相手に對して、一切の同様を見せず、ノーモーション

それが力の差。その力はあまりにも圧倒的。

ぐぢゅり、と。生生しこ音がした。

ガボツ、ゲホコ・・・ぐ・・・・・・・・・・・・・

わの音からして、舌を噛み切ったのだらう。

でも、なんで？

30秒ほどすると、秋瀬は息絶え、無様に地面に転がった。

七瀬は返り血を一切浴びていなかつた。でも、どうやつて秋頬の腕を切断した

その切断方法が、“今までこの世界にあった技術”ではないことは確かだ。

「水城ッ！！一体どうし……て、ええー？ナーニコレ？…」

「つ……あ、月島……」

爆破騒動に駆けつけた月島は、この状況を見て驚愕した。

「……秋瀬？なんで秋瀬……が……？」

説明なんて出来る訳がない。当事者の俺ですらこの状況を掴みきれてないんだから……。

「あれ？月島先輩……、いたんですか？」

こちらを振り返る七瀬の表情は、とても魅力的……とは言い難い、まるで小悪魔のような冷笑だつた。

「フフ……。水城御鷹先輩、月島先輩。それでは引き続き真犯人の特定でも始めましょうか」

は……？

今なんて？

「真犯人って……秋瀬じゃなかつたのか？」

「ええ。秋瀬さんは真犯人の能力で操られていました。だから舌を噛んだんですよ。戦えない下部に意味はありません」

・・・・・・・・・・

目の前で人が死んでるつていうのに……、なんで淡々と喋り続けることができるんだよ……。

「お前……、死んだ人間が怖くないのか……？」

「いいや、怖いですよ。でも怖がっている暇はないんですよ。…

・そんなことより、何かおかしいと思いません？」

「な、何が……？」

「たしか秋瀬先輩つて、お姉さんがいますよね。それも家の中に

・・・・・・

なんでコイツが知ってるんだよ……。

「名探偵さんはなんでもお見通しだな……」

「それほどでも……」

「

・・・・・。

「で？そのお姉さんがなんだつて言つんだよ・・・・？」

「まだ氣づかないんですか？」これだけ騒ぎが起きてるのに

「あ・・・・・・、」

そうだ。

「こんなに騒ぎが起きてるのに、おじかさんはずつとも来ない。

それビリバカ騒ぎもしない。

「なんででしょ？うねー。それは、お姉さんが真犯人だから・・・・」

「？」

愛理の素顔（後書き）

もうすぐ1章完結です。
感想など頂ければ幸いです。

ある一つの決着

どういう事だよ・・・・・。
まどかさんが超能力者で・・・、弟を使って犯罪を犯した・・・・・。
・?
・?

「お、おい七

「

「」明答よ?」

急な後ろからの声に、背筋がゾクッとする。
振り返るまでもない。

これは、秋瀬まどか本人の声だ。

振り返るとそこには、顔の上半分を覆い隠す灰色の仮面を付けた秋瀬まどかと、そしてもう1人の男が立っていた。

「クス・・・、頭がいいのねお嬢さん。お姉さん尊敬しちゃうわあ・・・?」

「一連の事件の真犯人ですね。秋瀬まどかさん」

七瀬は別段うれしそうでも悲しそうでもない顔で、名探偵さながらのセリフを吐いた。

まどかは仮面を外し、素顔を見せる。それは紛れも無く秋瀬まどかの顔だ。

「そうよ・・・。私が、ね。まあ私の能力自体大したものじゃないから、弟の能力ちからを借りたんだけどもね」

なんて・・・、最低の人間。

この人を1秒でもいい人だと思つた自分が恥ずかしい。
まどかは静かにまた仮面を付け直す。

「この人、秋瀬のお姉さんなの?」

月島が小さく俺に耳打ちする。

「ああ、そうだ・・・」

「妹がいるとは聞いてたけど・・・」

「妹もいるのか・・・」

正直、今居ない秋瀬妹のことなんて興味がない。

「それでは、あなたを拘束させていただきますが、よろしいでしょうか？」

「嫌だ。・・・って言つたら？」

「・・・、同じ結果です」

「怖い そんな正確だとモテないわよ・・・？」

「余計なお世話ですっ」

両者譲る気はないらしい。

この前の七瀬と月島を思い出すな・・・。

2人の会話を心配そうに見つめる俺と月島。いや、心配なのはそっちじゃない。

まどかの後ろ、仮面をつけた男だ。

髪は真っ白く、この場面で唯一常軌を逸している。まあ、2人が付けた仮面も十分だが。

しかし微動だにせず、ただそこに存在しているだけの郵便ポスト並の存在感しか放つていない。

明らかに怪しい。

「まあ、こっちも安安と捕まる訳にも行かないのよね・・・。

アハッ

まどかは、ニヤけた面で俺（仮面をつけてるので曖昧）を見た。

ぐしゃッ

なんだ？

どうもさつきからみんなが俺に注目している。

七瀬と月島は驚愕し、まどかはニヤニヤと俺を見つめる。あの白髪野郎は？

いない。

俺の体は無意識的に、地面に吸い寄せられる。さつきから何かがおかしい。

背中がじんわりと熱い。

意識が遠のく。

体が地面にねじ伏せられてから、ようやく悟る。

俺は白髪仮面野郎に、背中を刺された。

長剣で、ブスリと。

背中からドクドクと血が湧き出る。

視界が揺らぐ。

背中に亀裂が走ったかのように痛みだした。

死に対する恐怖心すら感じた。

まだ死にたくない。まだ死ぬには早い筈だ。

いやだいやだ嫌だいやだいやだ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だアツ！！！

その願いは決して叶わず。

俺は土の感触すら感じなくなつた。

そして意識は出ることのできない深い深い海の底へ・・・・。

さあ、もう準備はできた。
いつでも出発は可能だ。
覚悟はある。
自信だって、ある。
もうこんなのは懲り「こいつってんだ。
行こうぜ、俺。
行こうぜ、みずしづ水城秋兩ッ！
みずしづ水城秋兩ッ！！

ある一つの決着（後書き）

主人公を後ろから刺してみました。
でもこれでお話は終わりじゃないですよ！
ここからは元主人公、御鷹の弟である秋雨のお話です。
感想などくださいますよつとお願い申し上げます。

「目標の水城御鷹を連れて参りました・・・

そこは、お姫様が住んでいるようなメルヘンチックな部屋だつた。すでに息の絶えかけた御鷹を抱え、白髪の仮面男が言う。

男と見つめる先にはお姫様ベッドに座る、1人の少女がいた。

「ご苦労ね・・・つて、背中からブツスリじゃない・・・

「生死は問わない」と申し遣つていたもので

言葉の綾よー、と少女はイジけた風に男に近寄り、御鷹の顔をしげしげと見つめた。

「何よ・・・まだ死んでないじゃない

「急所は外しましたので」

日本ではまだ殺人が犯罪だというのに、この男はあっさりと御鷹を殺そうとした。

厳密には殺していないのだが、十分な殺人未遂である。

「コレはどうしますか?」

「・・・運んどいて。研究室よ

「かしこまりました。お姫様」

男はフツと笑うと、抱えた御鷹ごとどこかへ消えた。

少女の年齢はもう、17歳。

“姫様”と呼ばれるにはもう年齢が釣り合わない。

本人はやめるといつも言つてゐるが、あの男はいつまで経つてもそれをやめようとはしない。

「まったく、性格の掴めない男ね

そう言つて少女は、地面に転がつたナニかを軽く蹴飛ばした。

「この部屋、暗いわね・・・

明かりの付いていない部屋が明るいわけもなく、ヤレヤレと少女は立ち上がる。

地面上にゴロゴロと転がつたものを払いのけながら、部屋の電気ス

イッチまで歩いた。

電気を付けると、突然の眩しさに少女は目を背ける。

「つたく・・・こんなこと私にさせないでよね・・・」

しばらくしてシャンデリアの光に慣れ、まばたきを3回ほどすると、少女は目を開けた。

部屋の床には、ゴロゴロと人間の死体が転がっていた。

部屋の壁は返り血塗れ。

そこにはメルヘンなど一切残らず、残ったのは蓄積された恐怖と少女の姿だけだった。

「はあ・・・処分が面倒ね・・・」

少女と姫廬（後書き）

第1章が完結いたしました。
全部で10章くらいになると想います・・・。
長いな・・・。

第1章登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

第1章登場人物紹介

第1章・登場人物紹介

水城 御鷹 (みずしろ・みたか)

一般戦闘力：30（最高は100）

特殊戦闘力：0（最高は100）

主人公。というか、元主人公。

何か特殊なスキルがあるわけでもなく、いたって平凡な男子高校生。

中学生の頃に少し剣道をかじったので、基本的な戦闘能力はある。

趣味も特技もコレといつてナシ。

見ていておもしろくもなんともない人間だ。

水城 秋雨 (みずしろ・しゅう)

一般戦闘力：？？？

特殊戦闘力：？？？

第2章からの主人公。

第1章では大して目立たなかつたが、御鷹の弟である。
現在中学3年生。

趣味は筋トレ、特技は武道ならなんでも。

七瀬 愛理 (ななせ・あいり)

一般戦闘力：80

特殊戦闘力：999 (測定不能) (S H H F T - ?)

秋雨のクラスメイト。

金髪のおさげ。

戦闘能力においては、回避、防御能力に特化している。

未だに謎多き存在である。

学力においてもとても優秀。

月島 夜見 (つきしま・よみ)

一般戦闘力：18

特殊戦闘力：11 (SHIFT-1)

所有する超能力は『何もない空間から物体を取り出す能力（今までに見て触ったことのあるもののみ有効）』

未だに超能力について詳しく知らないが、使い方だけは知っている。

「～～かよー」や、「～～だろー」など、語尾を伸ばすクセがある。

身長は御鷹と比べてかなり低い。

クラスメートの榊雛姫の親友である。

榊 雛姫 (さかき・ひなき)

一般戦闘力：5

特殊戦闘力：0 (おそらぐ)

御鷹の幼馴染でクラスマート。

同じくクラスメートの月島夜見の親友である。

基本的に頭は悪く、成績はクラスで最下位レベル。

後半はほとんど空氣だが、果たしてまだ出番はあるのか・・・?

秋瀬 燦汰 (あきせ・さんた)

一般戦闘力：20

特殊戦闘力：15 (SHIFT-1)

『人工的な明かりを爆破させる能力』を所持している。

超能力者としてはかなり弱い部類だが、使い方によつては強い。その『強い』に至る前に死亡した。

ちなみに、能力をうまく活用するためには、懐中電灯を大量に持ち歩けばよかつた。

秋瀬 まどか (あきせ・まどか)

一般戦闘力：40

特殊戦闘力：80 (SHIFT-3)

物腰のやわらかい秋瀬燐汰の姉。
と思いきや、とてつもないD.S。
弟の燐汰を使って犯罪を犯し続けた。
なぜ途中から仮面を被つたかは不明。

秋瀬 凜々 (あきせ・りり)

一般戦闘力：？？？

特殊戦闘力：？？？

秋瀬燦汰、秋瀬まどかの妹。
まだ存在しか出てきていない。

白髪の男

(はくはつの…おとこ)

一般戦闘力…???
特殊戦闘力…???

見た感じの年齢は高校1年生くらい。
年齢に似合わず白髪である。
なぜ仮面を付けていたかは不明。
御鷹を殺そうとした張本人である。
それ以外の情報は一切不明。

少女 (しょじょ)

一般戦闘力 · · · ?

特殊戦闘力 · · ? ?

詳細は一切不明。

水城 春子 (みずしろ はるこ)

一般戦闘力 · 4 0

特殊戦闘力 · 0 (おそれぐ)

御鷹と秋雨の母。

今後出番は無いと思われる。

水城 武雅 (みずしろ・たけまさ)

一般戦闘力：89

特殊戦闘力：0 (おなじやく)

御鷹と秋雨の父。

物語開始時からすでに死んでいる。

剣道においては七段取得者。

八段を取る前に死んでしまったので、腕はかなりいい。

のりちゃん先生 (のりちゃん先生)

一般戦闘力：38

特殊戦闘力：0 (おなじやく)

光星学園高等部、三年E組の担任の教師。
担当はこう見えて家庭科。

ある街の路地裏にて

この世界は狂ってる。

ちょっと今まで気持ち悪いぐらいの平穏だったのに。

昔から、人間皆平等だとしつこいほど教わってきた。父からだ。父は剣道の腕がとても達者で、職業においても会社ではとても優秀な人間だった、と聞いている。

今はすでに死んでいるので確かめようもない。

人間皆平等だ。努力を積み重ねた人間は上に昇り、その努力を怠つた人間にはそれ相応の結果が残る。

父は俺にそう繰り返した。

だがこの世界は狂い始めた。

人間より少し秀でた存在、“超能力者”が現れたのだ。
まったく、世界は不平等だな。

何の努力もしないのに、手から火の玉とか出せるんだぜ？

まあそんな超能力あるのかは知らんが。

実際俺は超能力者ではないので、どんな超能力があるのかは一切知らない。

聞いた話では、相当奇妙な能力らしい。

人工的な明かりを爆破させたりとか、物体を何もない場所から取り出したりとか。

正直どうでもいい。

そんな能力を手に入れたところで、今更何が変わると？

能力を驕つて犯罪に手を染めるか、能力に怯えて一切使わないか、

それともその能力で人助けでもするか？

どうでもいい。どうでもいい。

まあ実際、俺はその超能力者の集団に囲まれているわけだが。

能力を驕つて犯罪に手を染めたバカどもだ。

「「にーちゃんええ加減金出したほうがええで？おっせん達変な能力持つてるさかいなー」

「持つてません」

「持つてないって「にーちゃんないやろ？ わりきもなんか買い物してたやろ？」

「もう使い果たしました」

本当にめんぢくさいな。この手の連中は。優しく話しかけてくるだけまだマシか。ひどいヤツらだと言い訳ナシでブン殴りてくるからウザイつたらありやしない。

「おうなんじゅいボウズウ・・・、じゃあサイフ見してみんかいイ・・・・・・」

ほんつつつつと、めんぢくせえなッ！！力ネが欲しいんならその気持ち悪い能力見せモンにして無様に金でも乞つてろつて話だ！

「あ？ 無いっつてんだろしつけえな・・・！」

俺のあからさまに喧嘩を売るような態度に、不良たちは頭に怒りのマークみたいなのが浮かぶ。

「あア！？ ンだてめえブツ殺されてえのかー！？」

「やれるもんならやつてみろよ・・・・・」

「あ！？」

「やれるもんならやつてみろつつてんだよクズー！」

「ワモテのお兄さんを相手にこじまでタンカを切ったのはいいが、正直この作戦は失敗だつたな。

「てめエ・・・・・大人ア舐めてんじやねえぞクソガキイー！」

俺を取り囲んでいた男達の1人がキレて殴りかかってきた。

右拳を大きく振りかぶつて、あの角度だとおそらく狙いは俺の顔面だ。

ケンカ慣れしてなさそうな不格好な殴り方。おそらく自分より強い奴に媚びてさんざん無駄な虚勢を張つて生きてきたんだろう・・・

同情するよ。

でも残念ながらアンタのプライドは今からズタズタに引き裂かれ
るんだぜ？

社会人にもなつてヤンキーかましてたヤツが、今から中学生如き
に気絶させられるんだよ。

まあ、やつてるこっちからすれば愉快極まりないんだけど。
アンタ相当無様だぜ。

だんだん視界を覆い隠していく右拳を、俺は寸前で左側によける。
ヤンキーの一人は何が何だか分からずに、拳を振り切る。
そして自分の拳が相手を捉えていなかつたのに気づくと、慌てて
右手を元に戻し、俺の姿を再びとらえようとした。

でももう遅い。

気づいたときにはもう地面に体をねじ伏せられていた。
起き上がるうとしても、起き上がれない。

誰かが抑えつけてるから？

いや、違う。

それはアンタの脳が揺れてるからだぜ？

俺は地面に転がったヤンキーを冷たい目で軽くあしらうと、残り
のヤツらが喚く様子を傍観する。
この中にどれだけ超能力者が混じっているのかは分からないが、
まあ大したことないだろ。

続いての暴漢は、あろうことか、懐からナイフを取り出した。

「兄ちゃん何モンや・・・？」

ただの中学生だよ、と答えよつとしたが、相手は大して聞く気も
ないらしい。

今度は別の暴漢が後ろから脇を固めるようにして俺を拘束した。
するとどうだろ。

ナイフを取り出した奴とはまた別の暴漢が俺を殴りにかかってきた
ではないか！

めんどくせ・・・。

肩を固定するのはいいが、腕まで固定出来ていない。

俺はポケットから、さつさつ買ったナイフを取り出すと、それを後ろで俺を拘束している男の脇腹に突き立てる。

「ギツ・・・・・つぐツ・・・・・！」

妙な奇声を発してその男は地面に倒れ込む。

俺に殴りかかってきた男も慌てて立ち止まつた。その隙が命取りになるんだぜ？

ゴッ。

俺は正面の男の鳩尾みぞおちかかとで蹴る。

そして、情け容赦なく、まだ倒れまいと踏ん張る男の顔面にもう一方の足で蹴る。

キックはかなりの隙になるので、こいついうバカな連中を相手にするときくらいしか使えない。

「このガキイ・・・・・・・・」

ナイフを片手にする暴漢、仮にこの暴漢を“暴漢D”と名付けよう。

まあ、ナイフをちらつかせるあたり、こいつは超能力者でも無ければ大して強くもない。

男は一切描写されることなく倒される結果となつた。

俺のどこを刺してやるかと悩んでいた間に、逆に俺がナイフでソイツの腹を一突きにしてやつた。

“暴漢D”という名前を貰つたにも関わらず、その名を一切使われないまま敗北した。

残る暴漢はただ1人。

超能力をもつていてと言つていたが、本当かねえ・・・・・。

「にーちゃんなかなかやるやないけえ・・・・・。でもなあ、社会にはルールつちゅうもんがあるんやで。おっさんがしつかり上下関係つちゅーもんを教えたるわ」

ルール？上下関係？

知るかよンなもん。

ほざくなら勝つてからにしろよ。

「アンタ超能力者？どんな能力もつてんだ？」

それでも敬語は使わない。

だつて、こんな社会からハミ出したクズ人間みたいなヤツに尊敬の念を抱く必要性が一体どこに？

どんな超能力だろ？が隙はあるんだよ。

隙があればこっちのモンだ。

ヒュン と、俺の頬を何かがかすめる。

それがおっさんの右拳であることはすぐに分かった。

ただ、とにかく速い。

もうなんとなく能力は分かつた。

「ワイの能力はなア・・・・『移動速度に×10する能力』や。さすがにアンタでもよけれのモンちゅうで・・・？」

「・・・・・」

速度が速まれば必然的に威力も高まる。
で？

それが俺に、よけられないって？？？

「じゃあ今から殴るからな？つまくよけろよ？」

おっさんはそう言つて、わざとらじく拳を後ろに振りかぶる。

なめんじやねエよ 。

ビュン。たしかに拳を振る音を聞いた。

俺がその程度のパンチをよけられないイイイ・・・？
ンなわけねエだろ・・・・！？！

おっさんの放つた一撃はたしかに直撃していた。

俺のナイフに。

俺は、といつと、おっさんの頭を使っておっさんの後ろに回避していた。

奇声

まあ、腕がナイフで引きちぎられて我慢できる人間ってのも少ないモンだ。

「いいいいいい！」

俺は地面にしゃがみこんで痛みに悶えるおっさんの背中を、ナイフで一突きにした。

そして追い打ち。

9

「あ～あ、つまんねえな・・・・・」

俺は路地裏にて、ナイフを片手で放り投げたりくるくる回したりと、弄んでいた。

地面には氣絶した暴漢4人。そして、死亡したおっさんが1人。やる事なんて何もねえ。

何もかもが、無氣力だ。

俺はナイフに鞘を取り付け、立ち上がる。もうココには特に用はない。

元々近道程度に入つただけだし。

帰るか・・・。といつても、家はないので公園に。またホームレスに逆戻りだよ。

もう何日も引きこもつてた所為で、自分を泊めてくれるような親密な友人などいない。

結局また来た道を引き返すだけ。

ダメだ。

どこからか殺氣を感じる。

「誰だ！？」

返事はない。

なぜ姿を現さない？

パン――――――――――

銃撃音だ。

狙いはもちろん俺。

俺は鞘に入れたままのナイフで銃弾を弾き飛ばす。
こんな芸当出来る人間はなかなかないが、街中で銃を撃つにん
げんもなかなかない。

「オイ、そろそろ出てこいよ」

銃弾の角度から相手の位置を計算し、その場所に向かつて話しか
けた。

すると、物陰から1人の男が登場する。

見覚えは 、ない。

しかし1回見ると忘れられないような、そんな男だつた。

男は真っ黒い服を着ていた。それも、膝まである「ート」のような
大きい服だ。

服とは裏腹に、髪の毛は真っ白い。

おまえに、顔の上半分を覆い隠す灰色の仮面まで付けていた。
な?忘れられないだろ?

俺はナイフをボロボロの鞘から抜き、構えた。

刃こぼれはしていない。

1万円も使つた甲斐あつたぜ。

「まあそつ身構えるな。さつきのはほんの挨拶だろ?」

ある街の路地裏にて（後書き）

主人公を交代しました（爆笑）
人生なかなかうまくいきませんね^-^
感想などお気軽にお願ひします！

バトルスタート！－！

挨拶・・・？？？

今のが？

完全に殺す気だつただろ？

力チャヤリ。男はまたもや俺に銃口を向けた。
そして

「パアン！パアン！…パアン！…！…！
銃弾を3発、放つた。

うち1発は壁に跳弾する。

いちいち銃弾を弾くのも面倒なので、無理やり体を捻り、壁に逃げた。

壁に逃げるというより、足だけで壁をよじ登る。

そして2手目が来る前に、持っているナイフを男に向かつて投げる。

しかし男は、どこからか取り出した刀でナイフを弾き飛ばした。刀といつても、長さ的には大刀ではなく、脇差程度の長さ。

「・・・・・ツツ！…？」

この態勢で銃弾はマズイ。

俺は無理やり壁キックをして、エアコンの室外機を掴み、それをそのまま引きちぎった。

勢いで落下する際に、それを男にブン投げる。

これが後に俺の必殺技になるかもしない、『必殺 時間稼ぎ』である（結局ならなかつた）。

受け身をとつて地面に着地。

すぐさま男を振り返ると、現在俺の唯一の武器であつたエアコン室外機は、4つに切り刻まれていた。

その代わりに、男の手には先ほどと同じ脇差程度の長さの刀が、もう一本。

どうする俺！？

すぐさま逃げる

正々堂々戦つ

自害

どうしよう…。本当にどうしよう…。
なんで選択肢に“自害”なんて作ってしまったんだ？…。
いや、どうせ死ぬくらいなら最後まで俺は男として、いや、漢と
して戦つてやる。

惨めに逃げるなんて死んでも嫌だ！…！

だつたらどうする。

どうやって勝つ？

いや、この場を安全に切り抜けの事優先か？
いや、それでも意地でも勝つてやる…。

男のプライドだ！

俺は男の方へ全力で走った。

大丈夫。策はある。

距離が10mほどになつた瞬間、俺はポケットから“ソレ”を取り出し、上へ投げた。

そう、ナイフと一緒に買った、『スーパー！砥石くわん SUPA R』である。

仮面男は“ソレ”を目で追う。

気づいた時にはもう遅い。

俺は左拳を男の顔面に打ち付けた。

男は2~3mほど転がる。

その時、刀を一本落とした。これはチャンス！…！

刀を回収し、男から距離を取る。

しかし、その刀に違和感。

とても、軽かったのだ。

よく見るとその刀身には一直線に無数の穴が空いていた。

軽量化の為に、強度を犠牲にした・・・?

「クッククク・・・・。やっぱり強いな貴様はア・・・・」

男は、口周りについた自分の血を拭いながら立ち上がる。

「てめえ・・・俺のことを知つてんのか・・・・?」

「あ、知つてるさ。嫌というほどにな」

俺はちつとも見たことがない。

そもそもこんな総白髪の若者見て忘れうつてほうが無茶だ。

「まあお前は俺のことを知らないと思うがな・・・・?」

なんだそうだったのか。

俺の記憶力は間違っちゃいなかつた。

「お前・・・・、名前は?」

それでも一応名前を尋ねる。

「呉織・・・・、天義だ」

「はあ・・・・。これまた覚えにくつそーな名前を・・・・・・

「貴様に言われたくはない」

まあ、秋雨だもんなー・・・・。

普通はあきさめつて読んじまうもんな。

普通に読まなくとも、"しゅうつ"となるし・・・・。

「ああ、休憩は終わりだ・・・・。第2ラウンドの始まりだ・・・・

! -

「チツ・・・・。血の氣多いなあー・・・・」

俺は極端に軽い刀を左手で握り締め、天義は右手で握り締め。そして、向かい合つ。

いつでも撃てる。

お互いがお互いのさぐり合い。

見極め、最高のタイミングを探す。

そして

パキイイイン!!

最初に動いたのは天義だった。

しかし、突いたその刀身は、根元から折られていた。

「…………？」

あまりの予想外の自体に、天義も秋雨も動けない。これは、秋雨がやつたものじゃない。

「ハイハイ。喧嘩は一時終了ですよー」

「…………ッ！？」

突然のゴング。

この緊迫した状況に突然、少女の可愛らしい声が響いた。

「貴様…………誰だッ！？」

「失礼ですね…………。人に名前を尋ねるときは自分から先に名乗るのが礼儀では？」

もつともだ。

「くつ…………俺は…………、呉織で」

「あーー。別に言わなくていいです。聞いてませんので」

「ぐッ…………」

天義はそうとういらついているようだ。

「私は七瀬愛理と申します。私が用があるのは秋雨さんだけなので、天義さんは帰つていただけますか？」

名前は途中で拒んだハズなのに……。

「そういう訳にもいかない。俺はこいつと戦つている最中なのだ」「なんですか？この刀と同じ日に会いたいんですか？」

この刀と同じ日に…………つまり、真つ二つにしてやろうつかこのクズ野郎、というなの意味だろ？

「チッ…………」

天義はおとなしくどこかへ去つていった。

「なんかよくわからんが、助かったよ」

「どういたしまして」

愛理と名乗る少女は、一瞬と微笑んだ。

「ところで、用つてのは？」

「ああ、そうでした。少し付いてきて欲しいんです」

「どこに？」

「行ってからの秘密ですよ」

そう言い、愛理と名乗る少女は俺の腕を掴み、走り出した。

「俺はアンタの事をなんて呼べば？」

「うーん・・・普通に愛理でいいですよ」

「そうか・・・」

よく見ると、俺の通っていた光星学園の制服を着ている。

「アンタ、俺と同じ学校なんだな。よろしく

「ええ、一応クラスメイトなんですが・・・」

「え？ そうなのか？ にしては見覚えないけどなあ・・・」

ましてや、同じクラスに金髪なんていたら忘れる訳がない。

「ええ、最近転校してきたばかりなので」

最近・・・俺が学校に行かなくなつてからか。

「こんな時期に？」

「はい、こんな時期に

・・・・・。

付いて行くのはいいが、この道はどう考へても俺の来た道だ。

しばらく走ると、突然愛理は止まつた。

「着いたのか？」

「ええ。着きましたよ」

どう見ても他人の家だ・・・。

「ここつて、たしかクラスメイトの・・・、秋瀬凜々の家？」

「ああ、そうですね。一応」

「なんでこんなところに・・・、てかなんで玄関がボロボロなんだ？」

「だ？」

「いえ、見て欲しいのは家の庭なんですよ」

愛理は門を開け、中に侵入する。

「お、おい・・・。勝手に入つていいのか？」

「いいんですよ別に」

適當だなー・・・。

門から玄関までは3mほどあり、そのスペースは庭になっていた。

そして、庭の中には

大きな、血溜まりがあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2758z/>

僕の平穏なる日常はやがて歴史を大きく変えるような世界の危機に変化するこ

2011年12月27日20時51分発行